陸前高田で
ぼくが
見たこと
きいたこと
思ったこと
4年石山碧

目　次

1、きっかけ

2、土地図

3 1日目「津波でんでんこ」

4 2日目陸前高田のしいま

5 3日目　長洞元気村と
　　きせきの一本松

6 陸前高田を訪ねて
　　思ったこと

1 きっかけ

ぼくは、小学生27人と明治学院大のお兄さんお姉さんと陸前高田のスタディツアーに参加しました。

この旅は、お父さんにすすめられ、最初は気が乗らなかったけれど、テレビで被災地の今を見た時、東北の人はあまり元気がないように見えたから、行ってはげましたいなと思い決めました。

2 地図

3、1日目「津波てんでんこ」

スケジュールは8月5日(月)～8月9日(木)の3泊4日でした。

東京駅から新幹線で仙台まで約2時間。その後バスに乗りかえ、陸前高田に向かいました。

バスの中で4時間。その車中、バスレクリエーションを行いました。

陸前高田はどんなところか想像してみようということで、それぞれ思ったことはノートに書きました。

がれきがいっぱいで、まだ、かんきょうの悪しくらし、ぼくたちと同じ年ごろの子たち

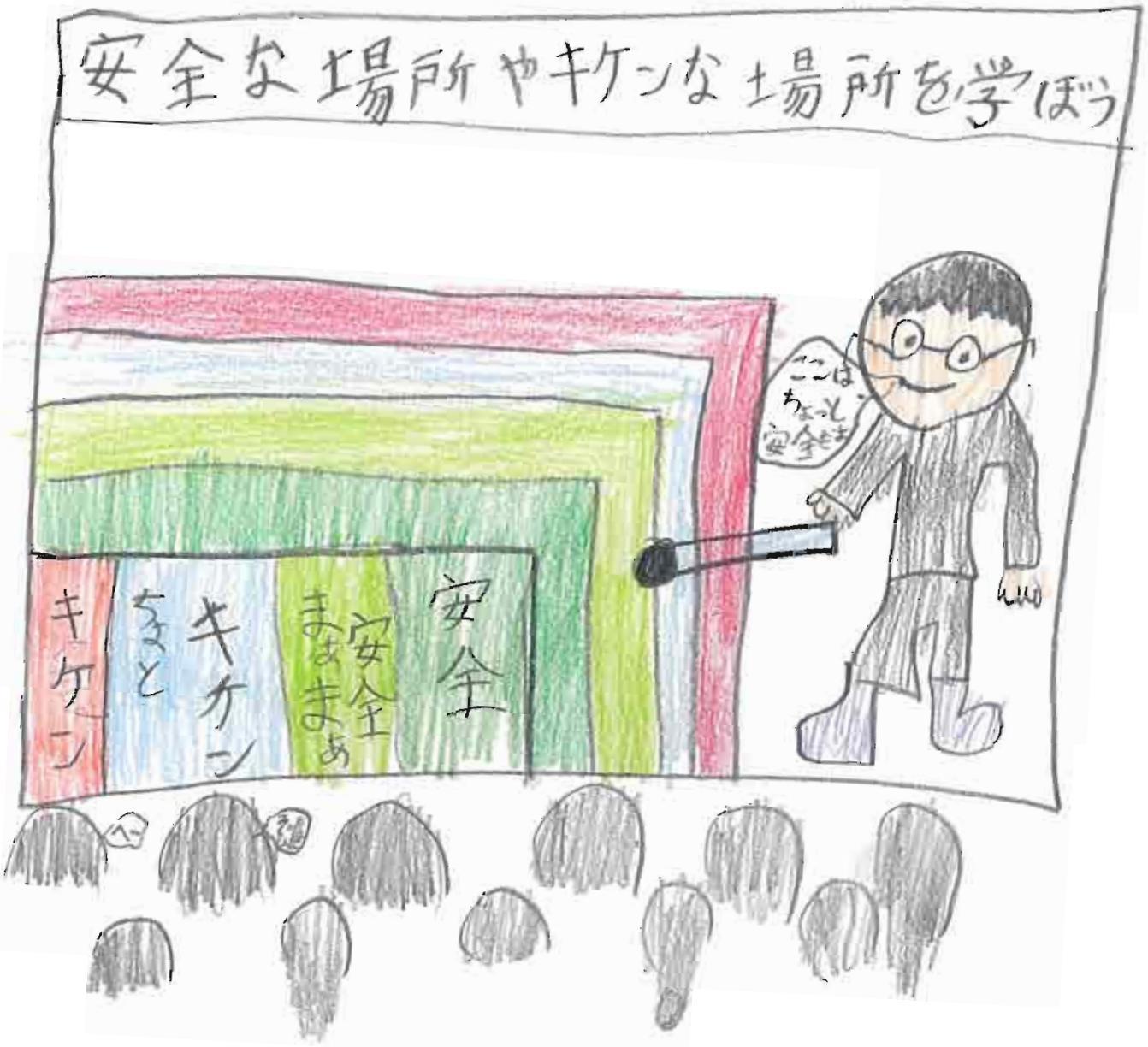
が遊ぶ場所が少ないのかなと想像しました。

いろんなことを頭に思いめぐらしながら、とうとう岩手県陸前高田市に着きました。泊まった所は山の上に建てられた旅館だったので、津波は来なかったので大丈夫でした。旅館の人は山の下の人のことでふあんだったそうです。

ここの旅館で、「津波てんでんこ」の紙しばいを見ました。

この紙しばいは大学の教授が津波が来ても大丈夫な場所ときけんな場所を色分けして教えてくれる話です。

そして「津波てんでんこ」というのは、
津波のときは、だれかを待たずに、一こくも早くにげる。命が大切だから、てんでんばらばらになっても、まずにげる。自分の命を最ゆうせんしてにげるそんな意味の言葉です。
この紙しばいを大丈夫なところをおぼえていて、助かったという話を聞きました。
その先生の紙しばいのおかげで命が助かり、津波のこわさなど三陸に住む人にとって大事なことを伝えることはとても大切なことだと思いました。


安全な場所やキケンな場所を学ぼう
ここはちょっと安全
キケン
ちょっと
キケン
まあまあ安全
安全

4. 陸前高田の、いま

陸前高田の被災した場所を実際にこの目で見る日です。

自分が想像していた事をたしかめたい気持ちと東日本大震災が起きる前の陸前高田市に来たので、本当はきれいな街なのに、がれきの山を想像する自分に悲しくなりました。

朝、宿泊先を出発し、陸前高田市、高田自動車学校に着きました。高田自動車学校は高台にあったので無事でした。その高田自動車

学校は、岩手県ではとても有名です。というのも自動車学校の社長、田村満さんは、大震災の直後は物資配送のきょてんとして教習所のしき地を提供したり、復こう支えんに、いそがしい毎日を送っています。陸前高田のリーダー的そんざいです。今回のツアーもいろいろ協力してくれました。

上の写真は東日本大震災前の陸前高田市で、下は3階建てのたてもの以外は全て津波で流され、あたり一面がれきだらけになってしまいました。

津波で家を流された人たちが近くの小学校の体育館にひなんしました。体の不自由な人たちもたくさんしました。

体育館にひなんした人たちは、小さい子どもたちから食べものを順番にもらっていました。

逃げたくても逃げられなかったおばあちゃんのところへ、助けが来て必死に逃げるところです。

震災から三か月後に、がれきてっきょが行なわているところです。

かせつ住宅に住んでいる子どもたちはいつも明るく元気です。

新しい命も生まれたところです。震災で多くの人も亡くなったけれど

2011年、3月11日午後2時46分。
宮城県沖から130Kmはなれた所で
プレートがはねあがり、はげしい
ゆれがおこりました。
約20分～30分後に最大15.8mの
津波（マンション4階相当の高さ）が
おそいました。
みるみるまに建物や車、人を
のみこみました。
あれから2年半。ほとんど何もなくなった
海岸沿い。インフォメーションセンターの
外へきだけ残りました。そのセンターには
津波発生時に3人いました。
屋上までにげた3人は必死に
鉄のぼうにしがみついてがんばった

けれど、「ぜったい生き残って下さい」と
言って1人、波に流されてしまいました。

高田松原インフォメーションセンターの中です。
海の近くなのでがれきがいっぱいありました。

被災地見学には、いくつか注意点があります。

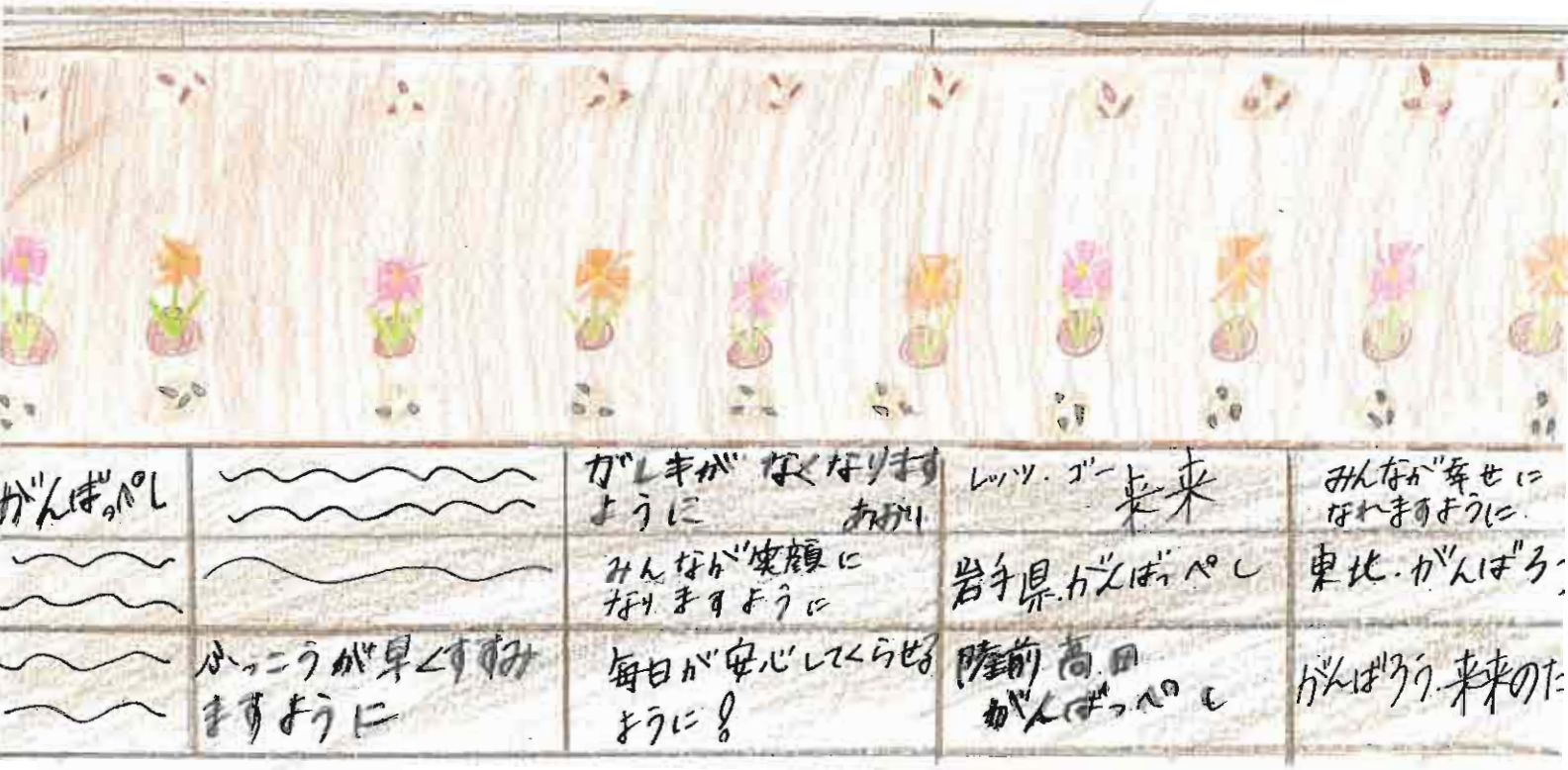
①写真をとって良い場所とそうでない場所があるので必ずまわりの人に聞いてからとります。自分や人とあわせてとる時はポーズをしてはいけません。

②そこで多くの人が亡くなっているということを忘れずに。

③さわがない

④現地の人に思いやりを持って行動をする

震災後、色のなくなったまちに少しずつ花だんを作っているところに、ぼくたちもボランティア体験として花だんを作り花のたねをうえました。



2日目の夜から、現地の方のお宅に
ホームステイをしました。
ぼくがお世話になったのは、
吉田弥津子さん、69才のお宅です。
吉田さんは、東日本大震災の少し前に
海の近くから高台へ引っこしていたので
無事でした。
けれども3.11のあの大きな地震と津波
が来た時は、
「また」と思い、こわかったそうです。
それは、1960年、昭和35年5月24日
南米チリで起きたM8.5の大地震に
より、発生した津波が大平洋を
こえ北海道南岸と三陸沿岸に

大きなひがいをもたらしたものです。
ねる前に79才で亡くなったご主人の話を
してくれました。ご主人は3.11で亡くなった
のではないけれど、初めて会うぼくたち
に、いろんな話をしてくれました。
初対面の吉田さんにしぼくは
きんちょうしていたけれど、自分の家族の
話をしてくださり、心がなごみました。
お話を聞いた後、仏だんに手を
合わせました。

5、3日目、長洞(ながはら)元気村ときせきの一本松

長洞元気村を訪ねました。

長洞は、陸前高田市の中心から南東へ7Km広田半島の付け根にある海に面する小さな集落です。

東日本大震災で、集落60世帯のうち、28戸が津波にのまれました。家を失った人は同じ集落の高台の民家に住まわせてもらい、食べものなどを分け合い、助け合いながらくらしました。

今ある仮設住宅は市や県の人と交しょうし、一緒に生活できる

26戸の仮設住宅をつくりました。
これが長洞元気村です。
元気村に着くとぼくたちを笑顔で
案内してくれるおばあちゃんたちに
出会いました。この方たちは
ここでなでしこさんとよばれて
います。
仮設住宅の中の集会所で
震災当時のお話を聞きました。
この集会所は元気村の人たちが
話し合ったり、歌ったり、みんなが、
おしゃべりしたいはっとする場所です。
そこで元気村のリーダー・村上
誠二さんの話で大事だと思ったのは、

自然をなめてはいけないということです。
3.11の大きなゆれが来た時、
津波の心配はしたけれど、
まさかていぼうをこえる津波
はこないだろうと思った人が
多かったため村のほとんどの人は
逃げませんでした。
だから多くの人が亡くなってし
まったそうです。
自然という力は強いという
ことをいつも心にとどめて
おかなければならないと
思いました。

この石ひには、明治29年につくられた石ひで、

「津波を聞いたら欲すてにげろ」

「ひくいところに家を建てるな」

「それ津波きびんに高所へ」

「地震があったら津波の用心」

の4つの石ひがありました。その石ひにひがいはなかったそうです。

高台からとった津波が家をおそうところです。

高田松原インフォメーションセンターの中はあとかたもなくなりました。

なくしたのでかなしかったと思います。
空どうになってしまいました。高台から見た時は自分の家を
案内してくれた村上誠二さんの家が津波により家が

きせきの一本松

これが、あの有名な
「きせきの一本松」です。
仙台からバスで陸前高田市に入った時、
この一本松がぼくの目にとびこんで
きました。
びっくりしました。テレビで見た時より
はく力がありました。どうしてこの松の
生命力のすごさにおどろきました。
なぜ「きせきの一本松」が残った
かというと、昭和35年のチリ地震が
起きた時その一本松の根っこのところに
津波で流れてきたがれきが地面と

根っこをささえるような形になり、3.11の
津波が来た時、50年以上たった
そのがれきがきせきの一本松の
命をたすけたのです。

6、陸前高田を訪ねて思ったこと

海の近くはがれきがたくさん残っていると思ったけれど、実際に行ってみたらがれきなどはなく、道路はきれいに整備されていました。

一番印象に残ったのは、みんな明るく元気だったことです。ぼくたちを案内してくれた陸前高田観光協会副会長のみよしよしまささん、高田自動車学校の田村さん、長洞元気村のなでしこさんと村上さんたちは、やさしくぼくたちに接してくれました。がれきは残っているけれどみんなえがおで花だんを作ったり、おたがいはげましあいながら、元気を取りもどそうとがんばっていました。

行く前にはげますことができたらと思っていたけれど、みんな明るくて、いつもわらっていて、とても元気でした。

ぼくたちが行くところ、「遠くからよく来てくれた」とかんげい

してくれてうれしかったです。

どうすれば、はげますことができるだろうと、考えるというより、ぎゃくに陸前高田の人から元気をもらいました。

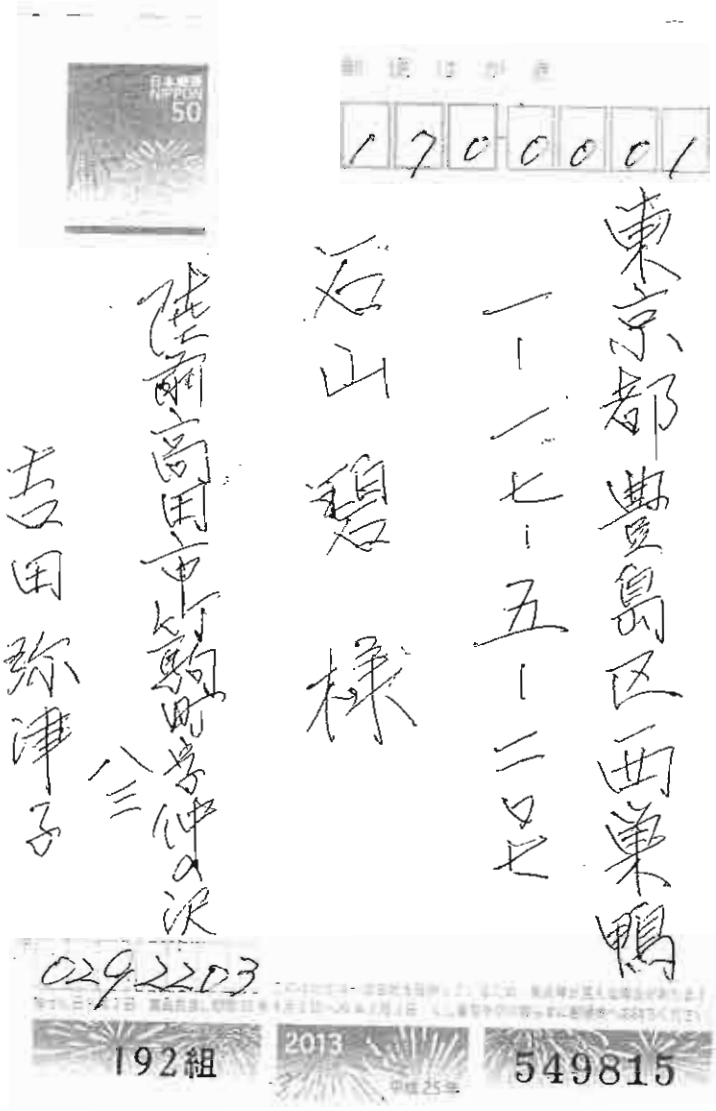
いっしょにすごした時間はとても楽しいものでした。

まわりにはがれきが残っているけれど、そこに住んでいる人は、とても強かったです。

☆カメラのじゅう電器をわすれ、写真があまりとれませんでした。反省点です。

グループのリーダー「ひるるん」こと登間さん

ぼく



碧君は一番いい子でした
素直で

さっそくに、お便り書いてくれて
ありがとうね。うれしかったです。
何回も何回も読みました
東京は暑くて大変だから、丈夫
な体をつくりましょう!!
碧君が大人になって陸前高田に
来てくれる迄 私も元気でいるよう
に頑張ります。
何事もなく無事にお家に帰れた
事をよろこんでいます。良かった ね。

郵便はがき
170-0001
東京都豊島区西巣鴨
一-一七-五-二〇七
石山 碧 様

陸前高田市小友町字仲の沢
八三
吉田 弥津子

029-2203

192組 2013 549815

ホームステイでお世話になった吉田さんからお返事をもらいました。

「素直でいい子でした。」と書かれていたことにお母さんは泣いていました。

吉田さんはやさしい人でした。ぼくは近いうちに吉田さんに会いに行きたいです。陸前高田に行ってよかった。自分にもう1人おばあちゃんができたようです。

参考資料

奇跡と希望の松
なぜ一本松の松だけが生き残ったのか
涌井雅之　三省堂書店

津波をこえたひまわりさん
今関信子　佼成出版社

ファイト新聞
ファイト新聞社　河出書房新社

かわいい子には旅をさせよ 2013年のメンバー